資 料

中学生版怒り尺度の作成

岩手県立大学 藤 井 義 久

Development of anger scale for junior high school students

Yoshihisa Fujii

Iwate Prefectural University, Takizawa, Iwate 020-0193

The purpose of this study was to develop an Anger Scale for Junior High School Students. Subjects were 326 junior high school students (167 boys and 159 girls).

First, the scale (36 items) was developed from a pilot test. Factor analysis suggested a four factor solution ("Relationship with friends", "Relationship with parents", "Frustration", and "Relationship with teachers"). The scale also showed acceptable levels of reliability and validity. In addition, a related factor of anger was analyzed by using this scale. The following results were obtained:

- (1) The anger level of students who feel high levels of stress is high.
- (2) The anger level of students who cannot understand the lesson is high.
- (3) The anger level for friends is high for students who have been bullied.

Key words: Anger Scale for Junior High School Students, Anger, Relationship, Frustration, Bullying

森下・津村(1998)は、学校ストレスやいじめが青少年の否定的な感情を高める大きな要因になっていると述べている。そこで、本研究では、学校ストレスや、いじめ経験が中学生の怒り水準にどのような影響を与えているかを分析することで、怒りの発現メカニズムを明らかにしていきたい。

さて、我が国では、現在、第4の非行のピークにさしかかっていると言われている(清水, 1998)。文部科学省の調査(1998)においても、全国の公立学校の校内暴力の発生件数が最近急激に増加している傾向がはっきり現れている。特に、中学生の校内暴力が増加していることに注目しなければならない。この第4の非行のピークの特徴として、普通の子が突然キレて、凶悪な犯罪を起こしてしまうケースが非常に多くなっ

てきていることが挙げられる。そのため、斎藤(1999)も述べているように、学校現場においても、“子供の心がよくわからなくなった”と、指導に息づまりを感じている教師も少なくない。Averill(1979)や大淵・小倉(1984)の研究によると、大半の人が1週間に1、2回は腹が立ち、腹が立つと一般に攻撃の衝動を感じ、実際に7割以上の人が何らかの攻撃行動を起こしていることを明らかにしている。このことは、最近、特に中学校で急増している校内暴力を初めとする攻撃行動と怒りとの関連性を示唆するものである。しかし、我が国においては、キレる青少年の問題がこれほど深刻化しているにもかかわらず、青少年を対象とした怒りに関する実証的研究は行われてこなかった。その原因として、青少年の怒り水準を客観的に測定できる尺

度が我が国には未だ存在していなかったことが挙げられる。諸外国においても、怒り研究は、もともとFriedman & Rosenman (1959) のタイプA行動研究の中で、怒りは、心疾患を生み出す危険因子となっていることが明らかになったことから発展した領域である。従って、不安や抑うつといった研究よりも、はるかに遅れているのが現状である。

そうした怒りを客観的に測定するために開発された尺度もすでにいくつか存在する。例えば、Buss & Durkey (1957) は、怒りが原因して生じる行動や態度から、個人の怒り水準を測定することを目的として、7つの下位尺度から成る“敵意尺度”(Buss-Durkey Hostility Inventory: BDHI)を開発した。また、Spielberger et al. (1985) が開発した“怒り表現尺度”(Anger Expression Scale)では、怒りを表に出さない“怒り内向型”と、怒りを外に出す“怒り外向型”に分け、青少年の怒り水準を多面的に測定しようとした。そして、怒り内向型傾向の強い者ほど、血圧が高いことを明らかにしている。

このように、客観的に怒り水準を測定するための怒り尺度も少しずつ開発されてきている。しかし、Harburg & Hauenstein (1980) も述べているように、本来、怒りは場面に応じて変化する情動と言われているにもかかわらず、既存の怒り尺度では、場面に応じて変化する怒り水準を測定することは不可能であった。つまり、質問項目作成の段階で、怒りが喚起される場面の違いに注意を払ってこなかったと言えよう。

そこで、本研究では、中学生を対象にして、場面に応じて変化する“中学生版怒り尺度”を開発し、その尺度を用いて、怒りの発現メカニズムについて解明することにした。

方 法

調査対象 公立中学校3校の生徒326名(男子167名、女子159名)を対象とした。内訳は、1年生118名(男子63名、女子55名)、2年生108名(男子50名、女子58名)、3年生100名(男子54名、女子46名)である。

調査時期 2000年6月～7月。

中学生版怒り尺度(暫定版)の項目収集 場面に応じて変化する中学生の怒り水準を客観的に測定するために、前述の対象のうち、各学年1クラスの計95名(男子48名、女子47名)に対して、怒りやすい場面に関する自由記述調査を実施した。具体的には、“あなたは、こういった時、腹が立ちますか。思いつくまま、自由に書いて下さい。—(例)友達にいじめられた時”と質問し、怒りやすい場面に関する項目が36項目収集された。なお回答方式は、3件法(腹が立たない、少し腹が立つ、とても腹が立つ)を用いることにした。

調査手続 担任教員が、授業中、前述の手続に従って作成された“中学生版怒り尺度(暫定版)”を生徒に配布し、一斉に回答を求めた。また、併せて、学校ストレス度、授業理解度、いじめ経験についても尋ねた。まず、学校ストレス度については、“学校においてストレスを感じることがありますか。”という質問に対して、3件法(全くない、時々ある、よくある)で回答を求めた。また、授業理解度については、“あなたは、普段、学校の授業内容を理解することができないと感じることがありますか。”という質問に対して、3件法(全くない、時々ある、よくある)で回答を求めた。さらに、いじめ経験については、“他者からみるとからかいやふざけと判断される行為であっても、本人がいじめであると受け止めるならば、いじめである。”という松原(1998)の定義に基づき、“あなたは、過去にいじめられたことがありますか。”という質問に対して、3件法(全くない、時々ある、よくある)で回答を求めた。

さらに、“中学生版怒り尺度”の妥当性を検討するために、日頃の学校生活の様子などをもとにして、各担任教員によってクラスの生徒の怒りやすさ傾向を3段階(低、中、高)で評定してもらった。なお、“中学生版怒り尺度”の信頼性を検討するために、前述の調査対象者のうち、各学年1クラス計98名(男子52名、女子46名)に対しては、同じ調査を1か月の間隔を置いて、

再度実施した。

結果と考察

中学生の怒りやすい場面 まず、“中学生版怒り尺度(暫定版)”の36項目の回答に対して、“腹が立たない”に0点、“少し腹が立つ”に1点、“とても腹が立つ”に2点という得点を与え、それぞれの項目ごとに、平均値及び標準偏差を算出した。その結果、中学生が怒りやすい場面として、“友達にだまされた時 ($M=1.42$)”、“先生にばかにされた時 ($M=1.39$)”、“友達に悪口を言われた時 ($M=1.39$)”などが挙げられた。つまり、中学生においては、自尊心を傷つけられるような行為に対する怒りが特に強いことが明らかになった。なお、平均値が0.50以下という、明らかに他の項目と比べて得点が低いと考えられる4項目については、以下の分析から外した。

中学生版怒り尺度の開発 平均値が低かった4項目を除き、残りの32項目について、男女別に、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、男女間の因子構造には違いが見られなかったため、男女のデータを一緒にして因子分析を行った。そして、固有値の変化及び解釈可能性から4因子解が最も妥当であると判断された。しかし、2つの因子に低い負荷が見られる項目が2項目あったので、それらを削除し、再度、同様の因子分析を行った。その結果をTable 1に示す。

まず、第1因子は、友達に悪口を言われた時や友達に無視された時など、友達関係場面において生じる怒りに関する項目に高い因子負荷が見られるので、“友達関係因子”と命名した。第2因子は、テストの出来がよくなかった時や覚えたことがなかなか思い出せない時など、したいことができないで欲求不満状態に陥った時に生じる怒りに関する項目に高い因子負荷が見られるので、“欲求不満因子”と命名した。なお欲求不満が怒りや攻撃を引き起こすことは、Dollard et. al. (1939)、宇津木 (1959)、Geen (1968) など、様々な研究において知られているところ

である。第3因子は、親に叱られた時や親にしつこく注意される時など、親子関係において生じる怒りに関する項目に高い因子負荷が見られるので、“親子関係因子”と命名した。第4因子は、授業中、先生にやりたくないことをやらされた時や授業中、突然、先生にテストをされた時など、教師と生徒との関係において生じる怒りに関する項目に高い因子負荷が見られるので、“教師関係因子”と命名した。以上の4つの下位尺度、計30項目から成る尺度を今後“中学生版怒り尺度”と呼ぶことにした。そして、学校現場で利用しやすい尺度を開発するためには、実施、採点及び解釈が容易であることが大切であると考え、各下位尺度を構成している項目得点を単純に加算する方法によって怒り得点を算出することに決定した。なお、4つの下位尺度間の相関係数をTable 2に示したが、すべての下位尺度間で中程度の相関が認められた。

このように、中学生にとって怒りやすい場面は、友達関係場面、欲求不満場面、親子関係場面、教師関係場面という4つの場面に分かれることがわかった。さらに言うと、欲求不満場面は、個人の理想と現実のずれから生じる怒り場面であるが、それ以外の場面は、すべて対人関係の何らかのトラブルが原因して生じる怒り場面と捉えることができる。すなわち、本研究で開発された“中学生版怒り尺度”は、怒りを喚起する内的要因(個人)と外的要因(他人)という2つの側面から、場面に応じて変化する怒り水準を測定できる尺度であると言える。

怒り得点の平均、標準偏差及び性差 “中学生版怒り尺度”の下位尺度ごとの平均値、標準偏差及び性差をTable 3に載せた。それによると、怒り得点は、全体的に女子の方が有意に高かった ($p<.01$)。また、下位尺度ごとの怒り得点で見ると、友達関係や親子関係において、女子の方が有意に高かった ($p<.001$)。すなわち、中学生においては、女子の方が男子よりも、特に友達や親に対して怒りやすいことがわかった。

中学生版怒り尺度の信頼性 “中学生版怒り尺度”の α 係数は、友達関係が.88、欲求不満が.86、

Table 1 中学生版怒り尺度の因子分析結果 (PROMAX回転)

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	h ²
[Ⅰ 友達関係因子]					
友達に悪口を言われた時	.72	.04	.12	.03	.53
友達に無視された時	.67	.18	.25	-.01	.54
友達が内緒話をしているのを見る時	.61	.29	.10	.00	.48
友達にだまされた時	.59	.03	.16	.11	.38
友達が自分の言うことを聞いてくれない時	.50	.18	-.04	.21	.32
友達に命令された時	.46	.05	-.04	.27	.29
友達が自分と一緒に遊んでくれない時	.43	.22	.18	.10	.28
好きな人にふられた時	.39	.09	-.12	.15	.23
[Ⅱ 欲求不満因子]					
テストの出来がよくなかった時	.17	.66	-.03	.02	.47
覚えたことがなかなか思い出せない時	.10	.64	.03	.16	.45
言いたいことが言えない時	.25	.63	.02	-.02	.45
学校の勉強がよくわからない時	.03	.60	.20	.10	.41
探している物がなかなか見つからない時	.01	.57	.26	-.09	.40
やる事が多くて、時間がないように感じる時	.15	.50	.17	.14	.32
ゲームや競争で、人に負ける時	.09	.40	-.01	.19	.20
[Ⅲ 親子関係因子]					
親に叱られた時	.24	.05	.69	.09	.55
親にしつこく注意される時	.09	.12	.64	.13	.45
親がだまって自分のかばんの中の物を取り出した時	-.03	.08	.61	.00	.38
親が、突然、自分の部屋に入ってきた時	-.23	.10	.55	.19	.40
親に、「勉強しなさい」と言われた時	.06	.05	.52	.18	.31
親にたたかれた時	.23	.01	.50	-.00	.31
親が自分の欲しい物を買ってくれない時	.12	.20	.42	.16	.25
[Ⅳ 教師関係因子]					
授業中、やりたくないことをやらされた時	.22	.03	.04	.64	.46
授業中、突然、テストをされた時	.05	.16	.10	.62	.42
宿題が多く出された時	.08	.09	.14	.58	.37
部活の練習が厳しい時	.09	.01	.05	.49	.25
先生に将来のことを色々聞かれた時	-.11	.27	.10	.48	.32
先生に怒られた時	.26	.05	.28	.40	.31
先生に注意された時	.29	.11	.19	.38	.28
先生に馬鹿にされた時	.28	-.11	.17	.36	.24
寄 与	5.54	2.00	1.85	1.57	
寄 与 率	20.2	12.8	9.1	7.8	

Table 2 中学生版怒り尺度における下位尺度間の相関

	友達関係	欲求不満	親子関係	教師関係
友達関係	1.00			
欲求不満	.40***	1.00		
親子関係	.31***	.31***	1.00	
教師関係	.42***	.33***	.39***	1.00

(注) *** $p < .001$

Table 3 中学生版怒り尺度の下位尺度ごとの男女別平均値(M)、標準偏差(SD)及び性差

	男子 (n=167)		女子 (n=158)		性差	
	M	SD	M	SD	T	有意差
友達関係	7.14	3.09	8.41	3.25	3.60	***
欲求不満	5.60	3.23	5.96	3.00	1.02	n. s.
親子関係	6.44	3.02	7.47	2.55	3.31	***
教師関係	6.25	3.12	6.27	3.04	0.06	n. s.
怒り得点	25.43	9.05	28.09	8.43	2.75	**

(注) *** : $p < .001$, ** : $p < .01$

親子関係が.83、教師関係が.84であった。一方、“中学生版怒り尺度”の再検査信頼性係数(間隔1か月)を算出したところ、友達関係は.79、欲求不満は.82、親子関係は.83、教師関係は.80という十分な値を得た。

これらの結果より、“中学生版怒り尺度”には、一定の信頼性が備わっていることが確認された。

中学生版怒り尺度の妥当性 “中学生版怒り尺度”の妥当性を検討するために、担任が認知している生徒の怒り水準と怒り得点との関連性について分析した。具体的には、各担任が日常の学校生活の様子などをもとにして、クラスの生徒の怒りやすさ傾向を、低(怒った様子を見たことがない)、中(時々怒る)、高(よく怒る)という3段階で評定してもらい、その怒り評定と、“中学生版怒り尺度”によって算出される怒り得点との関連性について、分散分析によって検討した。その結果をTable 4に示す。まず、評定率であるが、“怒り水準が低い”と評定された生徒は60名(19.2%)、“怒り水準が高いと評定された生徒は45名(14.1%)で、残りが“怒り

水準が中レベル”と評定された生徒であった。やはり、日常の学校生活の様子から、担任が怒りやすい生徒であるかどうかを評定することは、教科担任制や発達段階の問題から極めて難しかったようであった。そのため、多くの生徒が中レベルの怒り水準と評定されたようである。次に、教師の怒り評定と怒り得点との関連性について分散分析を行ったところ、有意な主効果($F(2, 309) = 6.62, p < .01$)が認められた。つまり、日頃の生徒の怒り水準と怒り得点の間には、密接な関連性のあることが明らかになった。さらに、最小有意差法(LSD法)による多重比較を行ったところ、低群と高群との間に有意差($p < .05$)が認められた。また下位尺度ごとに見てみると、友人関係と教師関係における怒り得点においてのみ有意な主効果(友達関係 $F(2, 309) = 4.43, p < .05$; 教師関係 $F(2, 309) = 5.73, p < .01$)が見られた。これらのことから、本尺度は、日常の学校生活における生徒の怒り水準を測定することが可能であると言えるだろう。

怒りの関連要因 まず、学校ストレス度と怒

Table 4 担任が評定した怒り水準と怒り得点

		担任の怒り評定						水準差	
		低 (n=60)		中 (n=207)		高 (n=45)		F	有意差
		M	SD	M	SD	M	SD		
怒り得点	友達関係	6.98	2.94	7.78	3.22	8.87	3.47	4.43	*
	欲求不満	5.35	2.93	5.78	3.11	6.51	3.19	1.83	n. s.
	親子関係	6.65	2.57	6.82	2.86	7.78	3.22	2.42	n. s.
	教師関係	5.68	2.93	6.20	3.03	7.64	3.25	5.73	**
	全体	24.67	7.44	26.57	8.92	30.80	9.23	6.62	**

(注) ** : $p < .01$, * : $p < .05$

り得点との関連を分析するために、分散分析を行った。学校ストレス度の質問に対して、ストレスを感じるものが“全くない”と答えた生徒57名を学校ストレス低群、“感じるものが時々ある”と答えた生徒185名を学校ストレス中群、“感じるものがよくある”と答えた生徒70名を学校ストレス高群とした。Table 5に、怒り得点と学校ストレス度との関連性に関する分散分析結果を示す。それによると、怒り得点と学校ストレス度には有意な主効果 ($F(2, 309) = 26.06, p < .001$) が認められた。つまり、学校ストレス度と怒り水準とは密接な関連のあることがわかった。

次に、岡安ら (1993) の研究からも明らかにように、中学生における学校ストレスの大きな要因となっていると考えられる授業理解と友人関係が、中学生の怒り水準にどのような影響を及ぼしているかについて検討する。まず、授業理解度と怒り得点との関連性について、分散分析によって検討した。その結果をTable 6に示す。授業理解度の質問に対して、理解できないと感じることが“よくある”と答えた生徒25名を授

業理解度低群、“時々ある”と答えた生徒185名を授業理解度中群、“全くない”と答えた生徒102名を授業理解度高群として、怒り得点との関連性について分散分析を行った。その結果、授業理解度と怒り得点には有意な主効果 ($F(2, 309) = 6.54, p < .01$) が認められ、しかも下位尺度で見ても“友人関係”を除くすべての下位尺度において有意な主効果が見られた。特に、授業理解度と教師に対する怒り水準との間に密接な関連性のあることがわかった。

さらに、いじめられた経験と怒り得点との関連性について、分散分析によって検討した。その結果をTable 7に示す。Table 7によると、“いじめられたことがよくある”と答えた生徒は16名、全体の5.2%に過ぎなかったが、“いじめられたことが時々ある”と答えた生徒が96名、全体の31.1%もあり、いじめの深刻さが改めて浮き彫りになった。そして、その“いじめ経験”と怒り水準との関連性であるが、分散分析の結果、有意な主効果 ($F(2, 309) = 4.14, p < .05$) が認められた。また、下位尺度ごとに見てみると、友達関係においてのみ有意な主効果 ($F(2,$

Table 5 学校ストレス度と怒り得点との関係

		学校ストレス度						水準差	
		低 ($n=57$)		中 ($n=185$)		高 ($n=70$)		F	有意差
		M	SD	M	SD	M	SD		
怒り得点	友達関係	5.98	3.34	7.84	2.93	9.10	3.34	15.98	***
	欲求不満	4.65	3.04	5.66	2.89	7.11	3.26	11.10	***
	親子関係	5.67	2.94	6.82	2.63	8.21	2.96	13.65	***
	教師関係	4.75	2.86	6.44	3.00	7.21	3.09	11.06	***
	全体	21.05	8.79	26.76	8.03	31.64	8.26	26.06	***

(注) *** : $p < .001$

Table 6 授業理解度と怒り得点との関係

		授業理解度						水準差	
		低 ($n=102$)		中 ($n=185$)		高 ($n=25$)		F	有意差
		M	SD	M	SD	M	SD		
怒り得点	友達関係	7.79	3.31	7.91	3.20	6.72	3.26	1.51	n. s.
	欲求不満	6.55	3.09	5.52	2.95	5.43	3.75	4.53	*
	親子関係	7.30	2.95	6.91	2.80	5.48	2.69	4.13	*
	教師関係	7.12	3.46	6.13	2.78	4.32	2.67	9.47	***
	全体	28.76	9.38	26.47	8.13	21.95	9.96	6.54	**

(注) *** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

Table 7 いじめ経験と怒り得点

		いじめ						水準差	
		全くない (<i>n</i> =197)		時々ある (<i>n</i> =99)		よくある (<i>n</i> =16)		<i>F</i>	有意差
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
怒り 得点	友達関係	7.43	3.17	8.15	3.20	9.81	3.64	5.05	**
	欲求不満	5.62	3.01	5.95	3.21	7.06	3.30	1.77	<i>n. s.</i>
	親子関係	6.77	2.92	7.00	2.78	8.31	2.60	2.19	<i>n. s.</i>
	教師関係	6.22	3.15	6.34	2.99	7.13	2.99	0.64	<i>n. s.</i>
	全体	26.05	8.75	27.44	8.78	32.31	9.04	4.14	*

(注) **: $p < .01$, *: $p < .05$

309) = 5.05, $p < .01$) が見られた。これらのことから、いじめられた経験と怒り水準、特に友達関係において生じる怒り水準とは密接な関連性のあることがわかった。

討 論

我が国では、キレる子供達の問題が深刻化している今日、青少年の怒り水準を客観的に測定できる“怒り尺度”を開発し、青少年の怒りの発現メカニズムを解明することは急務であった。そこで、本研究では、時代の要請に答えるべく、校内暴力件数が急増している中学生を対象にして、場面に応じて変化する怒り水準を客観的に測定できる“中学生版怒り尺度”を開発した。この尺度を用いて、中学生の怒りやすい場面は、友達関係場面、欲求不満場面、親子関係場面、教師関係場面に分かれることがわかった。すなわち、人間関係における何らかのトラブルが原因して怒りが喚起される場合が多いと言える。そして、中学生の場合、女子の方が、親や教師といった大人に対する怒り水準が有意に高かった。このような結果が出た背景には、発達段階の問題があると考えられる。すなわち、藤井(2001)が小学1年生から高校3年生までを対象にして行った怒り研究で明らかになったように、発達段階が進むにつれて、一般に怒りの対象が友人から大人に移行する傾向が見られることから、怒りの対象がどこに向きやすいかを見ることによって、ある程度、精神的発達段階を予測できると言える。このことからすると、中学生にお

いては、女子の方が男子よりも精神的発達のスピードが早いために、大人に対する怒りは女子の方が有意に高い結果になったのではないかと推測される。なお、“中学生版怒り尺度”の信頼性、妥当性についても検討が成され、一定の信頼性、妥当性が備わっていることが確認されたが、今後、これらの問題についてはさらに詳しく検討していく必要があると考えられる。

さらに、本研究では、“中学生版怒り尺度”を用いて、怒りの関連要因の分析も行った。その結果、学校ストレス度、授業理解度、いじめられた経験は、いずれも怒り水準と密接に関連していることを明らかにした。これらの研究結果は、森下・津村(1998)が調査対象にした“抑うつ性”、“攻撃性”、“登校拒否感情”といった否定的感情と同様に、怒りにおいても、学校ストレスがそういった感情を高める大きな要因になっていることが明らかになった。従って、今後、学校ストレスを低減させることによって、本当に中学生の怒り水準を下げるのが可能かどうかについて、さらに実験によって詳しく検討していく必要があると思われる。

今後、さらに生育環境と怒り水準との関連性について分析することを通して、青少年における怒りの発現メカニズムについて解明していきたいと考えている。本研究で開発された“中学生版怒り尺度”を用いて、他の研究において非常に遅れている“怒り研究”が、我が国でも積極的に行われるようになり、キレる子供達の問題を解決する方策が見つかることを願うばかり

である。

本研究によって、学校現場において生徒理解に役立つ“中学生版怒り尺度”が開発されるならば、現在、深刻化している“キレる子供達”の問題の解消に役立つものと期待される。

引用文献

- Averill, J. R. 1979 Anger. In H. Howe & R. Dienstbier (Eds.) *Nebraska symposium on motivation*, 28, 1-80, University of Nebraska Press.
- Buss, A. H. & Durkey, A. 1957 An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 42, 155-162.
- Dollard, J., Doob, L., Miller, N. E. Mowrer, O. H. & Sears, R. R. 1939 *Frustration and aggression*. New Haven: Yale University Press.
- 藤井義久 2001 青少年における怒りの発現メカニズムに関する研究 平成11, 12年度科学研究費補助金(奨励研究A) 研究成果報告書
- Friedman, M. & Rosenman, R. H. 1959 Association of a specific overt behavior pattern with increases in blood cholesterol, blood clotting time, incidence of arcus senilis and clinical coronary heart disease. *Journal of the American Medical Association*, 169, 1286-1296.
- Geen, R. G. 1968 Effects of frustration, attack, and prior training in aggressiveness upon aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 316-321.
- Harburg, T. O. & Hauenstein, M. F. 1980 Relations between anger expression and cardiovascular reactivity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 513-521.
- 松原達哉(編著) 1998 普通の子がふるう暴力 教育開発研究所
- 松本良夫 1985 少年非行・戦後40年の変遷 犯罪と非行, 65.
- 森下正康・津村孝幸 1988 学校ストレスといじめが子供の抑うつ性、攻撃性、登校拒否感情に及ぼす影響 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 8, 11-18.
- 文部省 1998 学校の抱え込みから開かれた連携へー問題行動への新たな対応 児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議報告書
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 301-312.
- 大淵賢一・小倉左知男 1984 怒りの経験(1): Avelillの質問紙による成人と大学生の調査概要 犯罪心理学研究, 22, 15-35.
- 斎藤学 1999 子どもたちはなぜキレルのか 筑摩書房
- 清水賢一 1998 少年非行の世界 有斐閣
- Spielberger, C. D., Johnson, E. H., Russell, S. F., Crane, R. J., Jacobs, G. A., & Worden, T. J. 1985 The experience and expression of anger: Construction and validation of an anger expression scale. In M. A. Chesney & R. H. Rosenman (Eds.) *Anger and hostility in cardiovascular and behavioral disorders*. Washington: Hemisphere Publishing Corporation.
- 宇津木保 1959 欲求不満と暴力 誠心書房